

## 中国語母語話者の作文に見られる漢語副詞の使い方の特徴

石黒 圭

### 要旨

中国語を母語とする日本語学習者は作文のなかで漢語を多く用いる傾向がある。漢語のうち、漢語名詞は書きことばにふさわしい硬い専門的な印象を与えるが、漢語副詞はくだけた話しことば的な印象を与え、作文で使うと文体的な違和感が生じることがある。

そこで本稿では、「全然」「一番」「多分」などといった漢語副詞が実際に中国語母語話者の作文で多用されている実態を調査するとともに、漢語副詞が話しことば的な印象をもたらす原因を考察した。その結果、漢語副詞には、事実とかけはなれた誇張（「誇張」）、根拠や基準の曖昧な認識（「概括」）、思いこみに基づく比較（「先入観」）を感じさせるものがあり、そのため、書きことばで用いると、厳密さに欠けるような印象を読者に与えることが明らかになった。

キーワード 中国語母語話者 漢語 副詞 作文 文体

### 1 はじめに

中国語を母語とする日本語学習者が書く文章の特徴の一つに豊富な漢語<sup>1</sup>使用が挙げられる。漢語は文章において書きことばらしさを高め、論文やレポートをもっともらしく見せる効果があるため、中国語母語話者の書いた作文は非漢字圏の母語話者にくらべ、ある種の格調の高さを感じさせることが多い。しかし、そうした豊富な漢語使用は、ときとしてマイナスに作用することがある。とくに、副詞を用いるさいに、話しことばでよく用いられる漢語副詞を多用してしまい、読者に文体的な違和感を与えることが多い。

- (1) しかし、憲法は一国の根本なので、多分修正する制限が相当に厳しい。
- (2) まず、虚偽の記載が絶対許されるべきではないと思われる。
- (3) 当時は、彼らは実に喫煙の弊害が全然わからなかった。
- (4) 日本の社会では、人と人の間に、結構礼儀を重視している。

(いずれも一橋大学の中国語母語話者の作文より)

(1)では、文末を「厳しい」という言い切りではなく「厳しいだろう」「厳しいと思う」という推量にすれば「多分」の落ち着きはよくなる。しかし、「多分」という漢語副詞自体が話しことば的なので、「おそらく～と思われる」としたほうがレポートや論文の文体にはふさわしい。

---

<sup>1</sup> ここでいう漢語は、語源から考える通時的なものではなく、現代の日本語使用者が意識する共時的なものである。本稿では「もちろん」「せっかく」などは考察の対照としないが、その理由は、これらの語が現代では仮名書きされるのが普通であり、漢語意識に乏しいと思われるからである。

(2)では、「絶対」が違和感を与えている。「絶対～べきでない」と強い語調で言い切っているのに、文末の「と思われる」はないほうがよい。それに代わって、「絶対」という漢語副詞がやや子どもっぽい語感を持っているので、「けっして～べきではない」としたいところである。

(3)では、「全然」が話しことば的である。「然」の付く漢語副詞は「偶然」「当然」「突然」などのように、話しことば、書きことばの区別にかんして中立的なものが多く、「漫然と」「平然と」「憤然と」のように「然」に「と」がつくものは書きことば的な印象を与えるものが多い。しかし、「全然」にかぎっては話しことば的であり、書きことばでは「まったく」が用いられる。

(4)は「人と人の間の礼儀を結構重視している」としたほうがわかりやすいが、そうしたとしても「結構」という漢語副詞が話しことば的で引っかかる。似たような意味の「比較的」くらいが、落ち着きがよいようである。

ある外国語の文法をほぼ習得しおえた上級レベルの学習者が文章を書くときに悩むのが、(1)～(4)のような語彙選択における文体差<sup>2</sup>の問題である。とくに、話しことばと書きことばの違いが大きい日本語ではその差が顕著で、内容としての水準がそれなりに高い文章でも、話しことば的な表現があると、読者の目には稚拙なものに映ってしまうことがある。上級レベルの学習者はそうした文体差の問題に気づいており、自らの手で校正したいと考えているが、語の文体差の記述は辞書にもほとんど見られないし、あっても不十分なものであるため、学習者は自分の書いた文章を母語話者に見てもらう以外、語彙選択の指針を得る方法はないのが実情である。

実質的な意味を担う名詞や動詞の文体差であれば、日本人学生と同様、専門用語として学べるので、さほど大きな問題にはならない。しかし、副詞や接続詞といった文法的な性格の強い要素における文体差の区別は、日本語母語話者なら自然に習得しているものなので、母語話者にはあまり意識されない、日本語学習者固有の問題になる。さいわい、文章を理解するさいに必要な理解語彙に比べ、実際に文章を書くときに用いる使用語彙は、比較的少ない語数ですむ。そこで、よく間違える機能語についてリスト化し、その理由をあわせて示しておけば、自らの書いた文章を自分でチェックできると考えられる。

とくに中国語を母語とする学習者の場合、冒頭で述べたように漢語の副詞を多用してしまう傾向がある。漢語は一般に書きことばに適した文体的特徴を備えているが、副詞にかぎってはそれが逆転しているものが多い。そこで、本稿では、中国語母語話者の作文でよく見られる、話しことば的な性格の強い漢語系の副詞の実態を記述、分析する。

本稿では、次の二つのことを明らかにすることを目的としている。2章で ) について、

<sup>2</sup> 本稿では、わかりやすさを優先して文体差と呼んでおくと、文体という術語を使ったからといって書きことばに限るわけでも個人文体を含むわけでもない。ここでは、ことばがその使われる環境によって生じる差、すなわち、位相差や使用域 (register) の違いを問題にしている。

3章で ) について、それぞれ詳述することにしたい。

) 中国語を母語とする学習者の日本語の作文に副詞、特に漢語の副詞が多く用いられているという点を量的側面から<sup>3</sup>明らかにする。

) それぞれの漢語の副詞が持つ文体的特徴、およびそうした文体的特徴が生じる原因を日本語学的に考察する。

## 2 中国語母語話者の作文に見られる漢語副詞の使用実態

次ページの表1は、中国語を母語とする学生が書いた作文に出現した漢語副詞の語数である。副詞として使われていたものに限定し、名詞などで使われたものは数えていない。「一橋大学」は、1993年から2002年の10年のあいだに一橋大学で文章表現に関連する上級レベルの授業に出席した学生の提出した436のレポートを、「東北師範大学」は、中国の東北師範大学で学ぶ学部学生が提出した30のレポートを、それぞれデータベース化したものである<sup>4</sup>。

以下の説明では、母数の大きい一橋大学のデータを中心に説明をおこない、東北師範大学のデータは、教室以外で日本語に触れる機会の少ない学習者の対照データと考え、必要におうじて言及することにする。

「絶対(に)」「全然」「全部」は、「かならず」(または「けっして」)「まったく」「すべて」にくらべ、出現頻度は低い。この三つが話しことば的であるということが、学習者にもそれなりに定着している可能性がうかがわれる。

しかし、「絶対(に)」と「かならず」の使用比は約1:3、「全然」と「まったく」、「全部」と「すべて」の使用比は約1:2であり、それなりの使用頻度で、書きことばのなかで使われている様子がうかがわれる。また、「絶対(に)」と「全部」はすべて漢字で表記されていることから、漢語であると認識されていると思われるが、「全然」にかんしては平仮名で表記されている例が14例と3分の1を占め、意識のうえでの和語化が進行しているように感じられる。

「一番」と「もっとも」の使用率は拮抗している。一橋大学のほうでは「一番」が「もっとも」を若干上回っている。一方、東北師範大学のほうでは16:3と「一番」が選ばれる傾向がかなり強い。

---

<sup>3</sup> もし「統計的に」明らかにするのであれば、中国語母語話者と中国語非母語話者(日本語母語話者または非漢字圏の日本語学習者)との比較が必要であるが、本稿ではそこまでの用意がない。あくまでも傾向や目安にとどまるものとしてご理解いただきたい。

<sup>4</sup> 貴重な資料を提供してくださった松岡弘教授(一橋大学)、桂玉植教授(東北師範大学)に深く感謝申しあげる。

表1 中国語母語話者の漢語副詞の選択状況

	一橋大学			東北師範大学		
	漢字表記	仮名表記	計	漢字表記	仮名表記	計
必然性						
絶対(に)	24	0	24	1	0	1
かならず	69	4	73	11	0	11
けっして	34	2	36	1	0	1
全面否定						
全然	28	14	42	7	0	7
まったく	23	37	60	0	5	5
全称性						
全部	31	0	31	6	0	6
すべて	10	55	65	1	2	3
最高						
一番	113	3	116	16	0	16
もっとも	62	38	100	1	2	3
蓋然性						
多分	34	13	47	0	10	10
おそらく	12	13	25	0	0	0
一般						
普通	4	1	5	0	0	0
通常	2	0	2	1	0	1
大部分						
大体	20	14	34	2	1	3
ほぼ	0	13	13	0	2	2
多量						
一杯	22	15	37	0	0	0
たくさん	7	78	85	0	14	14
(かず)おおく	75	3	78	8	0	8
相対性						
結構	12	3	15	0	0	0
比較的	11	0	11	0	0	0

「多分」「大体」という漢語副詞は、それに対応する「おそらく」「ほぼ」という和語副詞にくらべて使用率が高い。とくに、「おそらく」という形は東北師範大学のほうではまったく使われていないのが目立つ。この「おそらく」や、先ほど言及した「もっとも」などは、海外で日本語を学ぶ中国語母語話者にとってなじみがない、使いにくいことばである可能性がある。また、「多分」「大体」とも仮名書きされる割合が他のものにくらべて高いことも特徴的である。

「普通」と「通常」は漢語副詞同士の比較でもあり、用例数も少ないので即断はできないが、「普通」にくらべて「通常」というのはあまり使われない形式のようである。

量が多いことを表す「一杯」は使用率がさほど高くないが、同じく量が多いことを表す話しことば的な和語副詞「たくさん」の使用率が高く、量が多いことを表す表現における話しことばの優位性がうかがわれる。「一杯」も「いっぱい」と仮名書きされる割合が高いが、これは「一杯の水」の「一杯」と区別するためであり、副詞の「一杯」の文法化が進んでいるということを表していると考えられる。

話しことばでよく使われる「結構」と、書きことばを中心に使われる「比較的」はいずれも漢語副詞であり、その使用数も拮抗しているが、やや「結構」が上回っているようである。

今回は、上級レベルの学習者の作文が調査の対象であり、書きことばと話しことばの使い分けはそれなりにできている印象を受ける。それでも、話しことば的な漢語副詞を書きことば的な副詞に優先して使ってしまうケースの多いことがこの表からうかがわれる。ふだん耳から入ってくる話しことばの影響力が強いのかもかもしれない。

### 3 漢語の副詞が話しことば的に用いられる理由

前章では、中国語母語話者が作文のなかで話しことば的な漢語副詞を多用しているという事実を確認した。しかし、漢語は本来書きことばらしい性格を備えているものであり、中国語母語話者が書きことばで自らが熟知している漢語を多用するのは一つの戦略として十分成り立つものであると考えられる。

では、なぜ副詞にかぎって、漢語が話しことばでよく使われるようになるのだろうか。結論から述べると、漢語の副詞の多くが、事実とかけはなれた誇張、根拠や基準の曖昧な認識、思いこみに基づく判断などを含意し、書きことばとしての厳密さに欠く点があるためと考えられる。

その理由を一つ一つの副詞の意味を考えるなかで検討していきたい。

#### 3.1 誇張のグループ

論文やレポートに見られる書きことばの一つの大きな特徴は、感覚的な表現、とくに事実とかけ離れた誇張表現を排するところに見られる。

話しことばのレトリックとしては、相手の関心さえ惹きつけられればやや大げさな表現で

も許容される傾向がある。たとえば、日常会話では、足を運んだ図書館がたまたま2回続けて臨時休館しただけでも、「あの図書館、いつ行っても閉まっている」と言うことが可能である。しかし、論文やレポートでは「わたしが足を運んだ図書館は、2回続けて臨時休館だった」と事実らしくして表現しなければならない。「いつ行っても」のような全称性を含む表現は、こうした大げさ感を生みだすことが多い。ここでは、「絶対」「一番」「全部」「全然」を取りあげたい。

まず、漢語副詞「絶対」から見てみる。「絶対」は、すでに1章で述べたように、やや子どもっぽい語感を有している。その理由は「絶対」、すなわち100%そうだと言い切る表現者の姿勢による。よく、子ども同士が「絶対だな」「うん、絶対だ」「命かけるな」「うん、かけるよ」といった会話をするのを耳にすることがあるが、いまだ起こっていないことを絶対に起こると予言することは予言者でもないかぎり不可能である。それでも100%起きると言い切る姿勢に子どもっぽさが宿るのである。もし「絶対」のかわりに「必ず」を用いるのであれば、必然性が強調されるので、そうした語感はなくなり、書きことばとしても自然になる。

(5) 医療には「絶対、こうである」ことは少なく、治療法が絶対的に決まっている病気も少ない。(『毎日新聞』011124M)

(5)が書きことばとして自然なのは、「絶対、こうである」という話しことば的な発想を否定しているからである。100%こうだと断言する姿勢に、書きことばとしての不自然さが生まれる。

次に「一番」を取りあげる。「一番」が書きことばとして不自然なのは、「一番」という断定的な姿勢による。数あるもののなかで、当該のものが本当に「一番」であることを確かめることはかなり難しい。「日本で一番おいしいラーメン」というのは広告や店の看板ではありえても、厳密さを旨とする書きことばの世界では受け入れがたい発想である。

「一番」は「もっとも」と置きかえることで書きことばらしくなる。その理由は、「一番」というのは2番や3番ではだめで、文字通り1番でなければならない。それにたいして「もっとも」は1番を含む最上位グループに入っていることを示すもので、より現実的な表現だからである。たとえば、日本では信濃川のつぎに長い川である利根川について、「利根川は日本で一番長い川の一つだ」と言うのは不自然であるが、「利根川は日本でもっとも長い川の一つだ」と言うことは可能である。1番を一つに決めるのは難しく、1番だと断言した場合うそが混じることが多いが、最上位グループに位置すると言うのはさほど難しくなく、書きことば的な発想の厳密さにも十分耐えうるものである。

(6)「東海道でここは、一番、不便な宿場。それが売りですわ。なんぼ秘境でも、喜んでもらえる町づくりをしないといかんと思ってます。東京で道行く人にあいさつしませんやろ。ここでは普通やね。人が温かい」(『毎日新聞』010129E)

(6)は会話の引用であり、話しことばとしてはごく自然に響く。しかし、書きことばとして考えると、「もっとも不便な宿場」としなければならず、それが五十三次のなかでもっとも不

便だということを示す事実も合わせて提示しなければ説得力を欠くように思われる。

「全部」というのも話しことば的な印象がある。「全部」というのは、次節で触れる「概括」のグループに似て、厳密性に乏しい大ざっぱな把握を表すことばだからである。「全部」というのは、本来「すべて」「一つ残らず」の意味のはずであるが、「ほとんど全部食べた」や「だいたい全部終わった」という表現が許されるように、かならずしも「すべて」「一つ残らず」の意味ではない。一つ一つ数えあげて「全部」なのではなく、大ざっぱにまとめて「全部」なのである。したがって、「すべて」は「一つ残らず」を含意しており、書きことば的な厳密な発想と合致するが、「全部」は一つか二つ例外があっても許されてしまう場合があり、このことが、厳密性を旨とする書きことばで「全部」が使いにくい理由になっている。以下の(7)の例でも、「全部」と言えば威勢はよいが、小さな成功であっても、一つくらい成功した改革があってもおかしくない感じがする。

- (7) この参院選でどの政党が勝つか、負けるかという論議が行われているが、この問題の立て方が根本から間違っている。これから6年間、当選した議員に白紙委任状を与える選挙だ、ということをおぼえてはならない。今、改革、改革と言って、改革競争をしているが、もう二十何年も前から、何べんも繰り返して、全部失敗したのが日本の改革の歴史だ。(『毎日新聞』010712E)

「全部」の対義語「全然」もやはり概括的な把握である。否定の「ない」や否定的な意味を持つ語句と共に、「まったく」「すこしも」「一つも」の意味を表すはずであるが、次の(8)や(9)の例のように、程度の意味で使われる用法も目立つ。このことは、「全然」が全面否定ではなく、「全部」と同様に多少の例外を許す概括的な表現だということを示している。

- (8) 男子五百メートルの日本新記録を作りながら、これだけ不満げな選手も珍しい。「全然遅いタイムだと思えますね」。世界記録に100分の4秒差で「全然遅い」では、他の選手の立つ瀬が無いが、それが清水の実感だ。(『毎日新聞』010305M)
- (9) 「よっぽど[後]4九角と指そうかと思ったのですが……」と局後に森内。調べたところ、以下[先]7七金[後]1九飛成[先]4三飛成[後]6七香の攻め合いは後手勝ちの結論が出た。「なんだ、全然負けだったのか」と田中。(『毎日新聞』010122M)

以上見てきたように、誇張を表す漢語副詞は、「絶対」や「一番」と言いきるその極端な表現姿勢や、全称性のなかに例外を認めるあいまいな表現性により、厳密さを欠くことになりやすい。そのために、書きことばでは使われにくいと考えられる。

### 3.2 概括のグループ

厳密で分析的な表現が好まれる書きことばにおいては、大ざっぱなとらえ方を表す表現は使いにくい。とくに根拠や基準のない感覚的把握を表す副詞は文体的に合わない感じがする。そうした副詞のうち、「多分」「普通」「大体」「一杯」をここでは取りあげる。

まず、「多分」という副詞から考えてみたい。「多分」というのは漠然とした推測を表すこ

とが多く、「だろう」や「と思う」と共起しやすい。「多分~だろう」「多分~と思う」という組み合わせは、根拠のない推測、いわば表現者の憶測にたいしても使うことができるため、しばしば厳密さを欠く表現になる。

以下の(10)は「多分」が書きことばにたいして使われた例である。「一方、全国で十数万人の高校生が退学する時代となった。」という先行文が「多分~であろう」という推測の根拠として働いており、書きことばとしての論理性がそれなりに保障されているので、さほど落ち着きが悪くないが、「多分~であろう」という表現そのものは読み手の感覚に訴えかけて説得しようとするものである。

- (10) 一方、全国で十数万人の高校生が退学する時代となった。多分、高等教育を受ける若者は、世界の中でもトップレベルであろう。豊かな時代だからできることである。  
(『毎日新聞』010311M)

「多分」と似た表現に「おそらく」がある。これもしばしば表現者の憶測を表すのであるが、「おそらく」は「と思われる」や「ないだろうか」と共起することが多く、表現者の判断を前面に出さず、断定を回避したことを示す表現である。そうした断定を回避するという姿勢に、書きことばの文体にふさわしい慎重さがあるように思われる。

つぎに、「普通」を取りあげる。「普通」は読み手の常識に訴えて理解させようとするものである。ただ、常識というものの常として、人によって微妙にずれるということがある。つまり、「普通」といっても基準がはっきりせず、ある人にとって普通と思えることでも、別の人にとっては普通でないこともありうるのである。その意味で、「普通」という表現は大ざっぱな表現であり、書きことばで使うときは一考を要する。

- (11) 息子の1歳の誕生祝いに、夫がデコレーションケーキを買ってきてくれた。だが、彼は「ネームプレートに呼び捨てで書かれた」と憤慨している。「普通、“ちゃん”とか“くん”を付けるよなあ」と、すぐ書き直してもらった。(『毎日新聞』010219M)

また、「大体」という表現も基準の決め方が難しい。「ほとんど」「ほぼ」といえば、100%にきわめて近いという印象で一致すると思われるが、「大体」というのは大きな幅がありそうである。90%を「大体」ととらえる人もいるだろうし、半分を少し超えたあたりでも「大体」を使う人がいるかもしれない。このように、数量の幅が大きい表現は正確さを欠き、書きことば向きではない。以下の(12)では、「普通は」と並立されて「だいたい」が用いられているが、その「だいたい」が何割くらいになるかは明確ではない。

- (12) 僕は和菓子が大好きで、いろんな栗きんとんを食べてきました。うちの田舎では、サツマイモの中にクリが入っていますね。ところが、中津川のは、茶巾絞りの形をした全部がクリなんです。よそでも、そういうタイプのを食べたことはありますが、普通はだいたいクリがちゃんと形になるように何かを入れているんですよ。純正の栗きんとんというのは、もう中津川。(『毎日新聞』010923M)

「一杯」というのは、あるものを器に見立て、そこに当該のものがたくさん入っていると

ということで、幼い子どもが好んで使う表現である。「一杯」もまた人によって基準が異なる。「お年玉を一杯もらった」と話す子どもに、「いくらもらったの」と問いかえしても、「とにかく一杯もらったの」としか返ってこないことがある。この場合の「一杯」は、分析的な「いくら」という見方と対立する表現である。

「家がいっぱい建った」という以下の(13)の例も、「いっぱい」がどのくらい建ったのか、読み手によってイメージが異なるだろう。田んぼが完全になくなり、住宅ばかりになったと想像する人もいるかもしれないし、田んぼが家のあいだにまだ少し残っている姿を想像する人もいるかもしれない。「いっぱい」は相手の想像力によって具体的な数量を埋めてもらえない表現であり、その意味で、きわめて主観的な数量のとらえ方と見ることができる。

(13) 原口邦孝君(9)は昨年、川べりで魚や野草を調べた。「きれいだと思っていた川にはシジミが死んでいたし、僕が小さかったころにはたくさんあった田んぼにも家がいっぱい建った」と自然が失われつつあることを実感した。(『毎日新聞』010629M)

以上見たように、「多分」「普通」「大体」「一杯」といった「概括」のグループに入る漢語副詞は、事象を非常に大ざっぱにとらえる表現で、事象をとらえる主体の違いによってかなり左右される表現である。それだけ書き手の主観が入りこむ余地があるということであり、厳密さ、正確さを大切にする書きことばでは使いにくい表現である。

### 3.3 先入観のグループ

第三のグループとして、「先入観」のグループを立てておきたい。これは「思ったよりも」という発想を前提とする副詞「結構」「案外」が入る。「思ったよりも」という表現は、比較の基準が表現者の見込みになる。表現者の見込みというのは、原則として文脈には反映されないため、相手のことを知っている会話ならば、相手はどう思うかの検討はある程度つくが、相手にかんする知識がないことを前提とする書きことばでは、こうした副詞は使いにくいことになる。

(14) 算数ですから、軽い気持ちで入ったものの、いざ問題に向かってみると結構、難しく、私は、小3レベルからスタート。(『毎日新聞』010701M)

(14)は「大人の新聞記者の書き手」を想定してかろうじて成立する表現である。「結構」は、どんな書き手であるのか、その想定を要求するため、読者にとっては負担である。とくに、レポートや論文といった論証を目的とした文章では、執筆者の違いによって内容が変わってくるというのでは客観性に乏しくなるので、こうした属人的な表現は避けることが望ましいということになる。

「案外」は今回の調査では見られなかったが、「結構」と似た性格を持っている漢語副詞である。以下に例を挙げておく。

(15) 多分、編集部は、投票至上主義、人気＝掲載順位制というジャンプ神話を内外で効果的に利用していて、あえて否定しないのだろう。このテの神話は、案外マンガ批評家や研究者でも信じている人が多い。(『毎日新聞』010831E)

#### 4 まとめと今後の課題

本稿の議論は、以下の2点にまとめられる。

- ) 中国語を母語とする日本語学習者は作文のなかで漢語副詞を多く用いる傾向がある。
- ) 日本語の漢語副詞は、一般に書きことばのような硬い文体に適した性格を持っている漢語名詞とは反対に、くだけた話しことばに適した文体的性格を備えていることが多い。漢語副詞は主観性が強く感じられることが多く、事実とかけはなれた誇張、根拠や基準の曖昧な認識、思いこみに基づく判断といったニュアンスを感じさせることがあり、そのため、書きことばで用いると、厳密さに欠けるような印象を読者に与え、文体的な違和感を生じさせることがある<sup>5</sup>。

本稿では、中国語母語話者が漢語を書きことば的だと感じ、それゆえに文章を書くさいに漢語を選択するという仮定に基づいて議論を進めてきた。しかし、実際の語彙選択はそんなに単純ではないように思われる。和語であっても漢字のイメージから漢語的な感覚で選ばれるものもあろうし、中国語に類似の語があるかどうかによっても左右されると思われる。今後は中国語のがわからの個々の語彙選択の要因を探る必要がある<sup>6</sup>。

#### 参考文献

- 遠藤織枝(1988)「話しことばと書きことば その使い分けの規準を考える」『日本語学』7-3 明治書院
- 大石初太郎(1971)『話しことば論』秀英出版
- 工藤浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
- 定延利之(2003)「体験と知識 コミュニカティブ・ストラテジー」『國文學 解釈と教材の研究』48-12 學燈社
- 田中章夫(1999)『日本語の位相と位相差』明治書院

---

<sup>5</sup> 本稿では、話しことば的な漢語副詞を、書きことば的な和語副詞や漢語副詞と対比する形で考察したが、話しことば的な漢語副詞を書きことばらしくするためには、副詞をそもそも使わないという手段もある。程度副詞を中心に、副詞そのものを使わないようにしたほうが書きことばらしく見ることがしばしば存在し、日本語学習者の作文をチェックするさいには、こうした観点から検討を加えることも重要である。程度副詞が使われると話しことばらしくなる理由については、定延(2003:58)に、「言語情報は、程度が強調されるほど知識らしくなくなり、体験らしくなる」「話し言葉は体験を表しやすく、書きことばは知識を表しやすい」という興味深い指摘が見られる。

<sup>6</sup> 副詞にかんする日中対照研究には、張・渡辺(1983)がある。日中対照の語彙研究は主として名詞においてさかんであるが、名詞だけでなく、副詞においても、張・渡辺(1983)に見られるような考察が広くおこなわれる必要がある。

- 張麟声・渡辺実(1983)「日中副詞の比較 ムード副詞を中心に」渡辺実編『副用語の研究』明治書院
- 仁田義雄(2002)『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 半澤幹一(1990)「文章と談話のあいだ」寺村秀夫編『ケーススタディ 日本語の文章・談話』桜楓社
- 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 宮地裕(1963)「話しことばと書きことば」『講座現代語1 現代語の概説』明治書院
- 前田富祺(1983)「漢語副詞の種々相」渡辺実編『副用語の研究』明治書院
- 森本順子(1994)『日本語研究叢書7 話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
- 森山卓郎(2003a)「話し言葉と書き言葉を考えるための文法研究用語・12」『國文學 解釈と教材の研究』48-12 學燈社
- 森山卓郎(2003b)『コミュニケーション力をみがく 日本語表現の戦略』日本放送出版協会